さこめ本

古
哥こ謂と岩ふらう

へ12
利
20
8

へ12
20
4

ヘ 12
特別 門
號 20
巻 84

賢木　此巻ハ詞并哥を以て巻の名とせり　河　詞にハ榊

といさゝか折てもたまへりけるを　哥ニハ　神垣はしるしの

の杉もなき物をいかにまかへて折るさかきそ　花鳥

一　三ケ年の事あり　源氏廿二歳の九月より廿四歳の夏まで

此文(?)の事をもて有り　細　並同　奥津ハ巻名一名松か

うらとも云　哥にもあるか海士の住家となるかな

まつかうらしま

斎宮の御くたり　細　此巻中ノ文也　斎宮群行ハ九月十六日(?)清涼殿事也　時日　斎宮ハ此代かハりて

ちかうなりゆくまゝに御息所もの

心ほそくおもほす　やむことなくわつらはしき

におほえ給へりし大殿の君もうせ給てのち　さりとも

と世の人もきこえあつかひ宮のうちにも心ときめき

せしを　その後しもかきたえ　あさましき御もてなし

を見給ふに　まことにうしとおほすことこそありけめ

としりはて給ひぬれは　よろつのあはれをおほしすて

て　ひたみちに出たち給ふ　おやそひてくたり給

れいもことになけれと　いとみはなちかたき御ありさま

なるにことつけて　うき世をゆきはなれむとおほすに

大将の君さすかにいまはとかけはなれ給

給ふさんもむつかしうおぼされて、流さうそこげ[illegible]
ねもすさ海まてぶびくるふぶいめりし給りん。女房ま
ことをばいまさらあらまじきことく、おもひさまさ
おぼしし人ハこころげきそしと。おもひそささ
ともあはれはれいはすらしおもひこぶること
とれ涙さうださをおいなしと心づくしおぼして
なすべし。まとの夜はあはれさ海はいつり給おり
くあれどいとう志のびのすへば、たね夜え志り給はず
こやすくれこころまりまそて、まうで給べき
ましとうまつるあはれば、おぼつかなくて月日まへ
ぞつしぬる。院のうへおどろくそさされなやを

なれむけまそふおもてとおほすに。女ごさもこころば
ちろうしされど、ふらちなどもとふさびしくれせうそ
こありされば、いでやとはおぼしわづらひるずいひ
とおまりむまれいとさ添まれぞうりのこい
めでたとひとまれどもものちこさとし給そうりそさ
世の遥をかへりよりいと抱おられあまり秋の家
されおとろへ川おさなぢがつくもうれしくなすう出

万のおとろへて

給ひてもくちおしうおぼされて。れいよりそこげり

いとかなうさ夜まで。ふびんなるふいめんし給りん

ことさばいまさるまあきまじきこと。女君も

おぼえて。人はうろげさそすもと。おもひきさおふ

ともあんなりけれいゆすうしおもひこうぶるこ

とれ歳さうだうさをおいなすもと心づくおぼそ

なすらべし。まとの夜はいあるうさ夜はけうり給おり

かうれど。いふう志のびのえべ。犬ね夜え去り給はず

[illegible]

まうで給へき

まはあやでれいなすずとさぐやませすべし。

いとゞ御心のいとまなすれどけしきまれまおもひ

もて給ひんもいとおしく人ぶるなすけるくやよ

おぼしそうして。の家はまうで給九月七日ごろ

なれば。むげまそふおそとおぼすまゝ。女ぎさもこゝろほ

ちうしうれど。ふうちすずしと。ふびくれ。せうぞ

こありうれば。いでやとはおぼしひうひるすゞい

とおまりむまれいとさ深まれ。ぞでずりのふい

めんたとひとさしれどもおちうまさし給そりゝゝさ

空遊をかいり給よりいと拙おもるれなり。秋の家

まれおとろへ川。おさらぢがつしもうれぐなすり出

九月七日ころ

細川あて末なるに

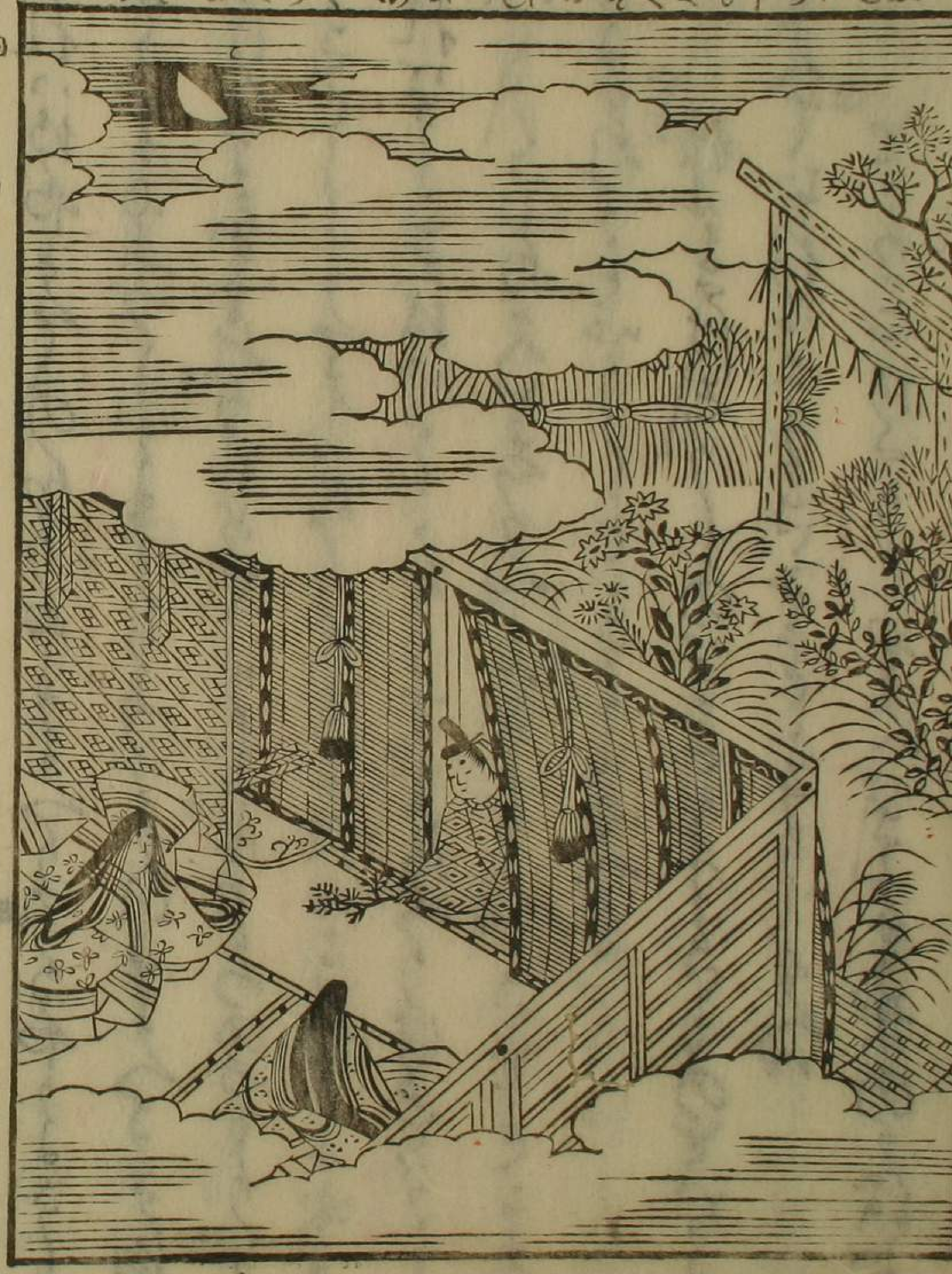
[illegible]

のゝは松風をこく吹あはせてそれことくもゆかり
れぬ程はまれ〳〵孫どもさしぐみそとしるいと
えんみすりむけましこさごさん。ずよんぞうふずい
ぞんことくさつさすずくみすりで。いふうつ志のびあへ
れどとはひきつくろひあへる。れようかいふと絶
でうくろしまへばれとともなりすくさまれども。亦
かうさんへあまりにておもくり。流ろろまもなすぞて
いまので。ふちるすさぞりつんとすゞさめかうこゝや
しうおぼさる拖そうみすげなすうらしぐ浪。おはぐさ。
まていふやどもあはりくいとうりそめなすぬんら。
ろろざのとりゐどもはさみすゞまかりしく。
こしけてされてけづくりしさきちすうまうんづ
かされまれどもこゝみしこまうちまそずきそでのが
どちまれいひふけそひみずも。はるまそさ夜うは。
みてこゆ。ひこさやうみすまはひうりて。ひとげすく
なすしあぐとしてこゝくまあれおもそしこさ人の。
月日をへぞてあへこん程をおぼしやみまいとい
うじう衣は心ぐるしかのさいのさうへくさをころは
うらうくれのひて流をうそてこゝそしのうおそびは
これやめて心すくこさけもひあまこ守ゆ。するそれ
のへづくのれせうそこぞうりて。こりうつへこさい
めくしあへさ夜まで。もあはれいひとまれしと

おぼしてかうやうのありきもいまはつきなきほどに
なりにて侍るをおぼししらばかうしめのほかには
もてなし給はでいぶせう侍る事をもあきらめ侍
りにしがなとまめやかにきこえ給へば人々げにいと
かたはらいたうたちわづらはせ給ふにいとほしう
などあつかひきこゆればいさやここの人めもみぐ
るしうかのおぼさん事もわかわかしういで
ゐんがいまさらにつつましき事とおぼすにいと
ものうけれどなさけなうもてなさんにもたけか
らねばとかくうちなげきやすらひてゐざりいで
給へる御けはひいと心にくしこなたはすのこばかりの

ゆるされは侍りやとてのぼりゐ給へりはなやかにさし
いでたる夕月夜にうちふるまひ給へるさまにほひ
にるものなくめでたし月ごろのつもりを
つきづきしうきこえ給はんもまばゆき
ほどになりにければ榊をいささかおりてもち給へりけるをさし
入れてかはらぬ色をしるべにてこそいがきもこえ
侍りにけれさも心うくときこえ給へば
神がきはしるしのすぎもなきものをいかに
まがへておれるさかきぞときこえ給へば
をとめこがあたりとおもへば榊葉のかをなつかしみ
とめてこそおれ

あはるゝのけちかひハわづらはしけれどさすがにいひさく
てたゞしはをしくりてねすり心にまかせてこそ
まうけべくも人も志りさひざ侍るおぼしくりける
をし月はのどかなりつれ心をぞりはさしもおぼ
されざりさまる心のうちはいふまでやはさすかりて
やごさうて猶もしのびそるあそれもさあつうく思ふ
りともへだゝりめるはげうしき心さいめんのむり
おぼしうするはおそれとおぼしこぶかうこそや
ひさりけるしこらしうりさきおぼしけど学
られて心のそゝるさのめ念はさしもえしとおぼ
しつゝむめれどえ志のびあらめれうしこきよく



心ぐるしうおぼしとまりぬべくさへ海ぞ見えし
給めり。月もいりぬるにや。あはれなる空をながめつゝ
うらみきこえ給ふに、こゝら思ひあつめ給
へるつらさもきえぬべし。やうやういまはとおもひ
はなれ給へるに、さればよと中〳〵心うごきて、
おぼしみだる。殿上のわかんだちなどうちつれ
てとかく立わづらふなる庭のたゝずまひもげにえん
なる方に、うけばりたるありさまなり。おもほし
のこすことなき御なからひにきこえかはし給ふことども、まね
びやらんかたなし。やうやうあけゆく空の
気色、ことさらにつくり出たらんやうなり

暁のわかれはいつもつゆけきをこは世にしらぬ
秋のそらかな。いでがてに御手をとらへてやす
らひ給へる、いみじうなつかし。風いとひやゝかに
ふきて、松虫のなきからしたるこゑもおりしり
がほなるを、さして思ふことなきだにきゝすぐし
がたげなるに、ましてわりなき御心まどひどもに中
〳〵こともゆかぬにや
大かたの秋のわかれもかなしきになくねなそ
へそのべの松虫。くやしきことおほかれど、かひ
なければ、あけゆく空もはしたなうて出給ふ。道
のほどいとつゆけし。女もえ心づよからず、名残あはれにて

ながめ侘ばのぞきてまつりゆる月かげのおちるさち
ねすばとおもはるるまほひたゞしけるさんべくちから
志あてておやまちも志りべくめでこさ地いかぞらり
のらりすてうかうれおりさ後をとふすてをもけうれ
きこてんとあいろすたずらぐとおくり。れ梅をつゝ
ようもこまやかなるハ。おぼしたすびくづりたすれど
まうちりんしさじめぐるのあくべきさしとたすくれねど
いとひあそしおとといさしもおぼさぬしとをそぶり。
なすけのさあるハよくいとひりげけおくべくめれど。為
してをしなんでのつてもはゞ学なしあれざりしれ
おうれかくてそむきのひたすんとするをはおしう

もいとおかしうもおぼしなやむべし。様のれさそり
ぞらうらるゝじめ人ぐのまでなまられのれでうど
なゞいくあしうめづらしさき後まで。とふひ聞え
のんぞなまとも おぼされど。おはくしうこ
ろうさ名をのこたすがして。おさまゐしと身の有様
をいまそしめうてんやうて。ほどちかくなりまくま。
おさむしたげさのよ。無常ハけうさかれ心また。不定なり
つうれいでうちのうくさくぎまりゆくおとうれしと
のとおぼしうり世人ハれいたゞきこともどくさも
家まもさ後ぐまてさせ見べし。何事も人はなどさき
なりはれぬこはやまげなり浮く世まぬけ出

めゐ人のなかりけれどもころをさゝとほくちるんだ

六日うつ川にて[illegible]へ志のふつねの儀式ほ海さ

つとてちやうふぞうしたまふさふめんぞちめとも

やむごとなきおぼしめされさせのまり院のにこて

ろよせもあれびちるべし出おふほど大将殿より御使

のつさもめのともすみりけ候くもりしてきさ

おまへよとて中ふつけらく大将ぶらそて

やし御もるけを弥も心あるはおぬき

れの中どもとられぬひのみぬをおぬるちし

御れしはりけしさはげしさ自どたれどなれん

ありうぞの御なぐ安副当してうせにまいり

[illegible]

くまけりこまそりの中[illegible]

どら彼をけやちぶさん大将いれ中侍ゆりうて

うちよりもまつる自しうおほをとうちすちられて

をとうらんもひとるうらち心ちしうまへばおぼし

とまりてそつれぐまなぐめおもすり家の風[illegible]

おとれくしき候ほく為くそこるおうちまくり

の自どよりいおうしうもおちすべきさるをならぬ

らとでやうまれいりうらくるけづちるは

ろうしずうるうかりくをまでけとしうそそ

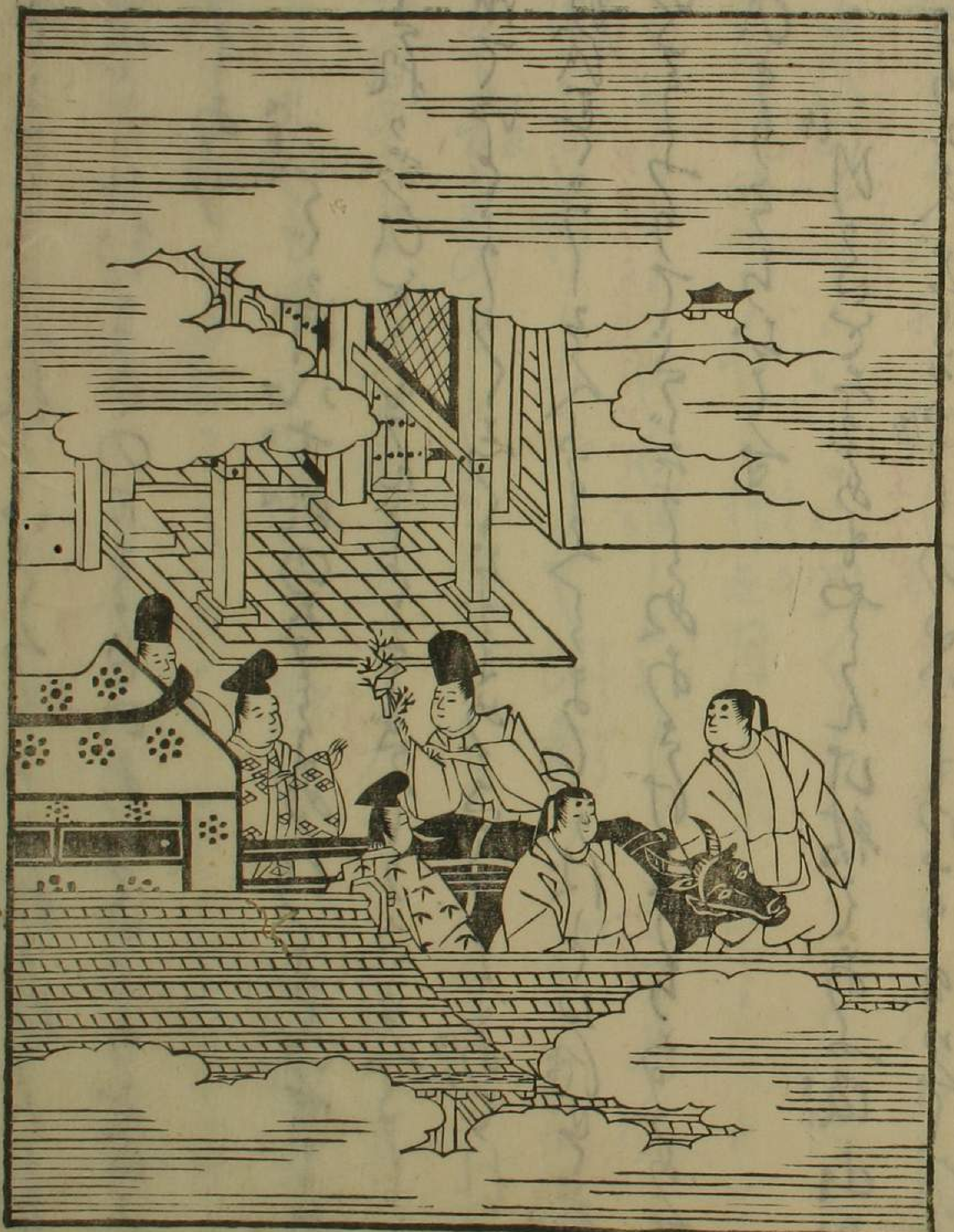
まうけけべりしいちけるかれほどをとうずなり

めうしそねるうれ世中さだめなきれいさいめする

[illegible]

やうもありなんとおぼして心よはうしあり
れけるひなれば此東おほかた日たかりさうの時
まうちまゐり給ふやさし家流こしまのり給へる
まつけてもちかおとゞのいとゞりみすさすぢあり
おぼし心ざしてはいさそてまつりすまひしあり
さ伝かかりて思ふ心の世まうちをもゝ結まも抽のこ
げさを求あそれけりおほさう十六まで御こ家あり
まいりまで妹まではとられそてまうりするまで
ぞかふまるそのへをも結ける
その袂をかふもけれど志のぶれど心乃
うちるもれそでるしき妹家は十四まで奴あけ

いとう川らうおもはずうち海とどうりうちすてそ
まりりう海へるぞいとどゆくしこえんでこそのくれ
こうゞ流心うござさて別の流しそまつり給ひやも
おもれまてさほされさせおひめいでおばまちさそ
まりるとて八省まてつゞけるにぞしぐか海
どもの袖ぐちあひもめすれめさ海よ心よのさけ
しきさすれば扇も人どももくはるそしのもられおし
むおほうそうういでおそ二条より洞院の
ちぼおれ給ひど二条院のまへたずればたぬの黒
いとあそれまおぼされてさらぬまきうて
ふりたてゝかはるるめさもとぐう河やう



殿上人も　せのすゝき袖をぬれしじや

細　ゆるぎの川ながれ出る所を
みかはりん殿上人もあそぶ
二条よりその南の　細二条院のうしろをながれすぐべし　京師ニ出ル昭訓門ニ至リ六角東洞路ニ南行至郁芳門
路ニ東折至美福門ニ南行即出東拔門ニ経二条大路東行至京極云々
に頭て　人つりくさかりてゆるぎの川かすかて八十淵のけと流りかぶさりても袖をぬらしたりんと流の
よりをかりけんのみとそてぬるゝ
まつの日　神ゆるぎの川ながれ出て淵田の社ありける所なるべし　師淵田社をいふれ神守の御額の指を撤して宮
にけるあそびてみのうし頭をふくみさまり
まつ川　細ゆるぎのそでもせよゆるぎがはもとし神やうしもぬれぞまさるおとなる人いあやしからう
んかり

とゞまりてまもれどいとゞくるしきはさはげしき
ほどなればするの日きさのおもむきよりぞ人
しあり
すゞか河八十瀬のなみにぬれぬれずいせまで
たれかおもひおこせんとよそぢてうさのへうしも
れていとゞしくおもひまめかしきのおほかる
けふぞこうしたへしまへるまゝくはゞとおばゞに霧
いさゝかりてふぐなうぬおきけまうちなすずめて
ひとりごちおもはず
けるとなずめもやらん比梢もあふ坂山を
こえうちすぎてそぼしのつもいまもわかりてぞひと

人やしをれ
やまとなでしこおさびしげなるみすゞめくしく給ましまして
まびのそこはいうる心づくしなるをおほり
けん院の御やゝ神無月なありてもいとゞとも
くおそしまよそ世中なおしこころくてぬ人なし
何よもうばしたすけきて此ごろ葉ありぞよのそられゆち
なも家の流とさぬくアトしさせおうてつぎては
いねのれしと後つゝ世をかゝす大小のことさべてそず
なまとどもれうしろことを世ぞのあひの程よりも
代をまもりごとむなもおろくちぢりあるまじう
なんこのもうゝすさ世中ならりべきさうある人
なりさうるなりでのづくりしうるみこともなるさず

二人まで、おほやけのれうしろう代せさせんやく
思ふまへしたまりそれ心しづへ、きせ給ふも、あられ
なうれ、ゆいごんども、おほりられど、女のまねすべ
こきとまし、あねたじられるちとにどるまうるか
いろしみどもいとうるしとおぼしてきるま
すゞへきうてしまゐすまじきうもしを、人をいくきうて
きせ給ひうちもいとききうるまねびまゐらす事
うまへるを、うれしくられ申しくまてまゐらせ
給ぐぶらあれば、いそぎ人々を世給ふ事を申させ給ふ
とおほくかすん、豊家もひとうびまとおぼしめし
されども、おきさは、げにしうまより目を人々てやうらせ

おそうれもの経よりいおとるびうけらしさはれ
之後まで、ひしとせひさうして、さ世給けらつまり
まなする心もあすくうれしと覚して、らてまゐり給ふ
此気色いと哀なる申、家いあるうちに、ことげをみへるとて、
さうそもうらせ給ふにもさ雨ぐれうろそうろれてお
ぼしめすうちよろけのことをこまして、ろせまへど、
いとあれちるるきされほどそすれば、うちろめさてれ
しうろそもうてせ給ふだ、ねとおもおほやけり
つうまるうまへきれこうろつひうれ、うやのれう
しろこしまべきことあとへとくの給ふ子細
かけてぞ人々も世給ふの、うる人へまするつかまうりて。

のちさか院、行幸はおとろけぢめなし。ある程
まて人々も給はらしうおほしめす。おほきさき紀
もまいり給ひなんとする時、中家のくちをしおいする
は、院心をそれておぼしやるふほどは、おどろく
あさきさ院はもおりしまさでうれさをあめおしを
そらるにまたふ人おほうり院位をさうせ給と
ぢりはこそあれ世のもうりごとをしげめさせ給
へるとも、げに世のおなじごとにて、おちしまい
けるほどみづからおりしまず。おほちおとゞ
いとこさうはさうがるうおりて、それはまてはるり
ずん世といゝすんと、上達部よくまれおもひ

なけく中家大ね度などいましてはそぐれてまれ
もおぼしけれど、のちくの御わざなど、けうじ
けうまつり給さ院もかくのみこゝちの御中
まことぐれすへるなどもそうなずういとおぼくれは
世の人もこゝろよせてまつりける

かれさせ給ひぬ
細太后の宗…
三師…とつく
…世のれ
…位を…て世の…
世…連…せ

細二条…
大臣…父之明
元二条太…
…相国…
越引入大臣…
之…四三月
…相国越…
…之例…
…孝事…師七月…
…桐帝の…

ふぢの衣ぞよやつれたまへるにつけても、かぎり
なくきよらなるに、こころぐるしげなり。ことに
しとうちひそみ給ふさまも、とおとこ給ふ。世を
いとあぢきなうおぼされければ、つゐでにもまづ
おぼしうつろふとはあれど、またさまざまのけ
かうしをりけれ、四十九日までは、なれこもりやとどむる
ちぎられ院にまゐりとひさぶらひけるを、とどめさせぬれば、
ちりぢりにまかで、給ふ寺のこの日あまれど、おほうちの
のよの中とぢむるこころのうちは、さらなりつけても。
まして、ありつるさま、中宮の御こころのうちなり。
おほやけさまの御心ともおぼしなからまつればつかうまつりまうせ

（頭注）
前の院そ よて十三日 著御して 今脱(ぬぎ)て又裁麻をて麻布を用る服の…
細河公服者著ス粉色 明衣ハ表ノ皮カテ御ス布之…素服ノ用ル布ノ…上ハ以日ヲ易月ニ
七年盗… 細河七…四十九日
（朱注）源氏服のさまに　遁世のさまかれこ　細紫式夕霧こ　桐壺のきこ　ナハナヌカ　細七七日のうち　師年の…　細右蓋のうち　若年ハ葦のうちに…

細河ニ呂后為人剛毅 史記

うまへいんせのうしろくすこうりんとおぼして
よりもあはれ、さてしまつるとしげのいにありさ海を思
いでさうてしまちめとさきのものまさまづてもおそ
しほなきまじうこれはかくへと出給はまうしうさ
ことうざりたるし、家に二条のみやはまうりつ給ひ
むり人は兵アて家まつりしまへり。ゆきさうちくやと
几らげもうて院のうちやうく人めかれゆきて
ものやうるる。大将殿まゐりまゐりておはします
御物語こまてし給。おまへの月かうの雲に隠れて
もう桜れしる後こまつてみつ
げひらこころれうし松やられまけんもうし葉ち

宮は川辛の御篭かなまぞうりのこともあるめま。
おゆうしきれあられまて。大将の御袖いとうぬれ
ぬいけのひまたうこあれある
さえつる池のうちんのさやけきるえるれし。
げとゝめぞうろしきおぼえてまいるおあすわる
わかしうぞあるや。王命婦
ようこられていちねの御もこ隠りともうこして
げのおせもめおかまつるでまいとあはれどさ
のこうきつゞくべきことはけりせ給ぶしさ
うろろのどせひあしまあられて、ふきさえやい
えりてこひのゆちま給るまはさずこうしてるる

とし月のほどおぼしめぐらさるべし。としかはり
ぬれど世中いまめかしきこともなくしづかなり。
まして大将殿はものうくてこもりゐ給へり。ぢもくの
ころなど院の御時をばさらにもいはずとしごろ
おとるけぢめなくてみかどのわたりところなくた
ちこみたりし馬車うすらぎてとのゐものゝ
ふくろおさおさみえずしたしきけいしどもばかり
いそぐこともなげにてあるを見給ふにもいまよりはかく
こそはと思ひやられて物すさまじくなん。みく
しげどのは二月ないしのかみになり給ひぬ。院の
御思ひにやがてあまになり給へるかはりなり

やんごとなくもてなして人がらもいとよくおは
すればおほくまゐりあつまり給ふ中にもすぐれて
時めき給ふ。きさきはさとがちにおはしまいてまゐり給ふ時の
御つぼねにはむめつぼをしたればこきでんには
かんの君すみ給ふ。登花殿のむもれたりつるに
はればれしうなりて女房なども数しらずつどひ
まゐりていまめかしうはなやぎ給へどみこゝろ乃
うちはおもひのほかなりしことゞもをわすれがた
くおぼしなげく。いとしのびてかよはし給ふことは
猶おなじさまなるべし。ものゝきこえもあらばいか
ならんとおぼしながられいの御くせなれば今しも御心

ざし故さうぢあり。院のおりしおしつゝ世をそ
はゞりをひつれ。君の御心いちやゝうぐ
おぼしいみあるゝどもれむくひきんとおぼしを
べりめりとまふれてりしるゝきことのこいりでく
れば、うろべきことゝいおぼしゝどゝうまりうる海
うめ世のうさまぢうちまつべくもおぼされだ。たの
おぼいとのもどき海しき心ちしおすてぞとまうち
まゝまいり給をずこ姫君をひきゝうぎてこの大ねの
君もうへつけおしれこうろと。君いおぼしきさて
よろそうもおもひきこてあきず。おやくの御心も
をしいありそばくおゝみす。お院の御世ありも。

りゝまうしてをとふりて。そゝうりがひり
おそすゝはおちゞきそしとおぼしそゝもとり
ちら犬ねいゝりしまゝる寸。ひゝゝゝまひのてさ
わゝひしくゞをも中ゝまこ海りまおぼし亟て
りゝぎんぼりしづきせひこゝてしまへるゝとりうざら
ふるれぼおゝれまりりゞゝきれろてろと。ひとゞいつさけ
きそうしのゝしぜもおちすじさ海るりがざりうすさされ
おぼしのおまうりもれさはがしこまでいき海るげま
そしまししをうるひのおひし乃ゞくもうゝくまそし
給よゞもおりうくゞしゝされしのびひりる
もおいりまうおぼしなりてぞよゝし給ねでいと

のどやかなるいまもあまりほしきこれ[illegible]なるを
うへのさいはひめ君の御さいはひを世の人もめでたき[illegible]
かの御なかにも人あれどこ[illegible]のさいはひの[illegible]
ある[illegible]みこゝろむけ[illegible]
[illegible]給ひ[illegible]
[illegible]もえわかれけるを[illegible]
[illegible]のものゝしや[illegible]
[illegible]まゐらするけにぞ[illegible]
[illegible]
[illegible]のひめ君も[illegible]
[illegible]

[illegible]
ざりけれ[illegible]かみをやおほせざりけん[illegible]
[illegible]月かれども[illegible]
けるとかく[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
のち[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

おとゞりくはゝ宮、いえそむ、さきの代の
まいりぐしぬ心まどひうるぬやうなりしづゝ
さのつこまされどうんのまへに心をくれぬ心こゝろぼそし
うらへばうらあるくてもおぼつかなくおすにたゞん
の三壇法ほうのくじめて行はしむおそし
ますひまなうひて例の夢のやうなるまで給
れ芳おほしろほそどのつぼねより中納言の
もまいらでまいりたる人めもたげきこえ
あれば御おもちいとゞうれしげなるを見おそろしう覚
ゆひ給ふまらてもいひとゞまりぬれば殊なれば
まりてめでたき事どものあまたしためれば

みこしのみそうかく、むかしの
ことゝかへ給へる心ざし
（頭注）まづしく元年ナリ、海ニ史記ニ云、孝恵為人仁弱ナリ
細こころえんの父大臣まろ
みづからかへ給へる一をも見る
わり侍りて
五壇のみずほう、御修法、降三世・軍荼利・大威徳・金剛夜叉・中央不動
秘密念仏に侍る、壇の中にて行ふ不動を中尊として五大明王の法を修するなり
明中壇本尊
以御薬師
中納言の君
細 朧月の女房の名なり
ありけるにて
まいりてあるべきことを

（朱）朱雀院の御
（朱）細 朧月の母の御事也
（朱）至 深き御なさけ
（朱）まろ 朧月のことなり
（朱）細 嵯峨院の后の御事也
（朱）朱雀院の
（朱）細 朧月の心深く思ひけるに
（朱）細 朧月のこと也
（朱）中納言の局の細也
（朱）朧月の事
（朱）中納言ての

でうはよろしう思ひめしけるをいとゞをかしうもてなし
されこそうるはしきさまにおはしましけれ
しらぬ夜のさうび(?)のうちにてみまほし
しきけちにひかりたるゆくやとおぼ
ゆるまでさまにまさりてさきぬ
けうちあれ(?)さまをあはれとおほし
げにありつぞ(?)あるべきさまなるをへ
おこすれどだにかくなれば
きこゆることをもおろかならずおぼしめしける
けとゞめもあかずして
心やすからぬ袖をぬらしつゝ

（頭注）盗賊はおもしろしきさきいふなり
五巻おもしろうきさまなる事、帝の御心をなぐさめさせ給ふ
師か武臣にて朧月よりさしいらへ給ふ
朧月の
左大将をことに
帝にもそれよりおぼしめす事也
ことかと思ひける
世にもてはやされ給ふ人の御さまの
あはれなる様をとりわけさせ給ふこと
さうしてはいふ
とゞめけるを
若大将上達部其上ニ中宮ニ侍候
藤原朝臣之中将
令旨次将殿上人中宮ニ侍候由
朧月
とかくの人近く侍りて
（朱）たゞ人の御さまなり
（朱）御心
（朱）宮の一割
（朱）一節と絶えてこそさりけれ

主

声をかけても どのね 鹿もかぶちて いとかうし
おげさつて ワが身をうくて すぐせとや むねの
あくべき時ぞと もろくも ろけ 心なくて いぞでまひめ衆
うつきおりけさ 雨衆の えもいらずうらわるゝま
いとひうやつれて かうひろしのへうし もずら
まれちさ此 有信まで 義貴殿の 此きうどの 歌中将
うぢつぶより出で 花のすこし 鹿あうらで だとこ
のまとるとそうける 氏ぢでて すぶ結けんもうていと
あしかれ ましさ 字ゆりやりまあうちなりしや
うのとよつけても まてとるれ つれちさんの
此心をうつれめで うつしと おゝまひさとし 結ものうる

我うろの くうさて いるばつま 心うしやさ
おばし給 ありお伊ろ 酒 まゝうり給ゝん ことばぶう
おくしく をしうそく おばしそゝうて 芸家をと
そまうり 底とあを おばつらすく おもを給 文
これましさんも 抱し あちれだ ぞうのだ將の君
とそぞうけ まるれと 思しの たるま おばこれ すくき
此ろの やまあまど もされば 此胸を いがし給
いゝ此くうも 宰文を 此んじちて むちるう
うとお まづるま いてお ちてろそ まいまさるま
まろとしの ろてしおりて 我身へ さろまれそて
芸家の 此とめまぞるぶ よりしめとし つぐさ

ふすまと扇をまつとおそろしけれバかいのりを
さへさせ給てぶくとさひやまぬやうてまゐらんと
おぼしいそぐぬるきのぶれのぼるいけるかおり
まうありけんおきまうてちかづきさまゆるゝ
ころかへりさばかり給けんしくば、ちかへあらり
それバ夢のやうなるこそありけるとものぶべきやうも
なくるしけりけるまへどさくいとあるらるゝまて
あられ給ひてそでしなれむをいとうるやこ
まへむらふさひけるきの命婦・弁などぞおさ
おほうさそでまかりあつまりおとなしうつるし
といひあひ給ことかきりなうさふらひゆくさに

うさゝむ寺ちちかてかけし心もうきまされバいめ
けるてまされどいで給もやすかりぬめ成るやうす
おどろきて人ぐちかうまいりて志げうまゐへば
われもあさましでぬりごあるをいれんれておい
それぞどもうしまうへのところとどもいと
ひけし宮いまれをいそぎびしとおぼしつるまゝ
ぬ気あかりてぞすけなやましうおとせ給

かくこりうら給ひつゝ
御源のかく葵おうりかりしまうまうと葵つき初多くさうし
五行
人こしきさ給心葵の世為くち源のかくてかいしまうまと葵へあるく源のそふおかつをと葵のましめさいの御悲おそんべくれりて

其あつ宮の大夫などまいりて、僧めせなどさはぐ。源だにいとゞびしうさておぼすらうじてられゆくほどまでぞてらのぐくこもりめ給つべんとはおぼしもうけぞ、人でもをもられころはほどさじとてうくみすんとをしさぬるべし。ひかのおもしはいざりいでゝおりしまいす。よろしうおぼさうくみあらんとてこやもまうで給ぬどしておまへひとずするまするも給ふ。れいもけちくみすりさせ給人すくみそれはこつきしこれものうところみどもぞさぶふ。命婦の君みどいりまさぶりてりぶしさてまいりん。

こゝのひさしへいれけるが世話ちんいとおもしろかりければ
うちさしのぞきあるに源はこれはめりごゑのこゑのほそ
めやかなるさまをやさしとおもひあけくれ屏風のそ
ば近くはいりつゝひいりすめづらしくおもひわびしさまも
あるをいかがおちてえうちまうし給ふばかりといとうつくしう
てそあれ世やつきめんとそでとれることをおもひて
あへるものこそしらめうちたゆずなすめしう言ひ給ふ
ふびものをどうまとてまいりすへうりちちこのふる
あまりともしたまひりし御ひれどもいれ給
なず世の中をいとうあはしうやめつ気色まで
のどかるなすずめいりまへるぞいふじうゐうらげ

なちらんずりしらつつきれどものゝろきのむくゝゆ
ふざりけるさまはりしさそどこそれさいの姫君は
さぶふ前あるし年比すゝこともひとりすれさまへのぼ
けるをおさまらしてまで御あはしまへるがさかとふゝ
まつはすまして世ひのたちけどもろあつうちし
給けりとうかうづしてけうるさ極みなどもさせるゝと
人ときりさづくさ源るさ給ゆるうかるりて思ひ
さめ身えてし心のかひのなしまやさ極とまゝいろどう
わびまつり給はけるかとうひかるうあはしまする
心まどひしてやとうさ情のうちまうてけしひよ
ふまてれどもれつるはひさせうとし給けるひきうく

さと匂ひよるを、おぼしうしみつけられけるをおぼされて、
やがてこれにつけてもまづおもひさまさせ給ひしとゞこそ
ろやましうつゝみてひきさげさせ給へるまゝぞを
すべしとてさてなをのこりおほかるも、あはれ
かしのさうぞくなれ、それにつけてもいとゞ心うくすゞしの
ほどをおぼしなされて、いかにしておぼしけり。おとこも
こゝろせとてこそけふのあはれなるもこそおぼされて、
うへしばしはあはぬやうのことをえずなく
うしとみえしものへど、まことには心づきなしとおもひて、
ひとへもなくしおほくものゝいとゞすゞしきをやまし
さは、うちわかれてものうくおぼえてなげかしく

つきせぬ御こゝろのほどをおもひつゞけ給ふ。さすがに
いらへもきこえ給はで、ものまうしさぶらはんとあしざりして
とまりはおはしまさねど、おほかたにつけてはいと口をしうおぼ
されければ、うつし心もなく、ひとりの御のがれて、
こよひもあけゆくをみても、さぞおぼしさすらんも
かつけける心をおもひしみけるをみたまへれば、いとゞ
むつかしさまでものさびしう、いみじうおぼさるゝに、なぐさむる
かけ給ふべくいまは、おぼしけるにも心もなくて
などかゆめにもものせしかば、ぬるよもなかりけること
やうやうあかうなりゆくに、おもひつゞくることもやすからず
とまりてゆかしくおぼしける、あけはてぬれど、いでさせ給へそ。

いふかひなきことゞもなし。家ハなかなかはるかなるさまやうあり
けれしこそ心ぐるしかりければ世中はかりとさてし
めされんもいかゞなればやがてうちぬるをものも
又これ世をすくめつゝとたすけあるべきことゝちゞ
猶もひきつけさまであはしいれり
おふことのこころにかなはずとも
くちをしくおもひしかばへに
きこえしおへにさすがなうちみけさそて
るすまさせのうちは人のつしてもれい
心をおもてえてるんてあるいひなすさせまへる
さ御のいふかしるさ心ちすれど人のおほさんまも

けふれまあもくるしかれば何ともおもひてはいそ
いけこをおまつるは。まゝてまでさしてこそまか
いかおしとおぼしそろぞくらとおぼして。かゝをと
もとより猶そぞうちさてで事どもまゐり
猶そうごまりなりて。おもふことしいはどりけり人の
これこころとこ人のうち恋しうかるゝ事心
ぶましおもうきまけかりやゝやましうさん
ばさらまれ心ばそくおすぞや世まふれだうさとて
まされどおぼしかるはこの御ものいとうぶる
げまて哀なうちこれをうかしるべるとすそん
さといとりて。家まちみ御例もおほしかめ

なれ〳〵 御ちかき御衣よりあらはし 呼 ありまへして又御名御所にて常服とえらびてあり
無服にては かへて 御院の崩にてよりて人奉きし兵服の廿三のゆりの服をあてし無服の事に 明 桐帝
ましての宮女〳〵
撲の姉君ありける給 呼 撲の無服に桐帝の御めらへ〳〵 御服なりて七日の服三日のいと後にすり給
もろく日数をさへさまし
かとのいはきみにつくり 内親王為無服 真子女王 被先祖之女 文德天皇中務卿 に和五年ト定除王例此一度頭
且素 元年 穆子女王除王諸親の例とさだめて帝王系図を考るに穆子は光孝天皇の内親王也
無服とおぼしてあてしこそ 親王の御服作の料 細親王の後に親遠く無服 式に云 若無親親王者

かりうとさつめられてこもりゐ。ともづれさまよひを
合戦などいひておもしがりくさても。さやも平家の流
つあはれおぼすまいれ心やすき絵ぞんじやいてもおもしく
世をはかなきさまをわきまへひとつ絵は、ひらきちる
おぼしこれとも、やとくすがすくるしうおぼ
さんべしうかこととしまは、いとぐしき世なり。
うきみさへまりいでたるん。おほぢは記のあかきずきさ
ことはのあふるか、くるねともさりなんとやうしく
おぼしたる院のおぼしの絵ぞせし海のなすのめ。
あるしざりしとおぼしめすまも、まろびのもとにありし
まもあつまかりゆく世までこそあはれ戚夫人のと

けむめれやうまくてあるさまもなるかひとうとまん
みすらとてはかりぬべき身なくてあはれなずらひと
おしうすゞしがるおぼされかせさせむとさるらん
わとしとおぼしとるまは平家のさそまへそで。おもが
いろきんとあはれるおぼされば、地びやうまて
まいりまうで大猫のなさるとよさなれのくまで、おぼし
かくめとよるくのうつくしまうりし絵をれ也ちちやもう
そらすこそつけてけれどかうまうまりすず。おほ
くのれとよいてひいおそすやうやすれどむ、げり
おぼしうまはけりと心やすきぞちとひにもおもしがり
くく世。家をいうたじりようかしうおそしうちびめそて

めづらしうれしと笑ひてむつれよろこぶかな。
くるしとこまり給ふも。およばしのすがりつく
げにあれどもうちわりをとけよつけても世の有様
あられぬふるまひうちくとものをおもはり。お
はゞかりのこゝろもいとゞすゞりつゝて。出の給
まもりまうすとまれてうつりかれば家乃
流るゝあまもおやこゆくしくみゐるげまつて
およばしさぶれて。慚愧ひさしうりんはざる。
うちのことぶ御まてうるそげまつりて候らば。
いかにおぼせられ候をそふしまへど。流りかとうち
またりのそ成戸クやうすや。いうそきはありし處

ちんと思ひその給ひふかひるあられまそふれい
おいそ給れバよるとぞさはあしくぞいひそれ
ふりもうどうくてふきさあやまぞとやさてゐの
そうのやうはへすり給ひんとすれバとゞそてまいらん
ともいかぶひさしうりんべきぞとてあすらうまのへど。
まのあぶちそ父しうおそきねバ思ひしと手をとりて。
あるぞのおつれバいづしとおぼしてぞすゞみるぞ
むきとまへる。流地いづしいゆしくとてうつまつてまこ
のみつげる白ひまへるよ涙。おとろひび給ものあり
まづうれ流のかをめぐりすゞまつり。流されすらしく
ちそぶちのうちらそて思ひをめぐる袖うちつ

くしきは女にてみたてまつらまほしうきよらなり
いとかうしもおぼえ給へるこそ心うけれと玉の
きずにおぼさるゝも世のわづらはしさのそら
おそろしうおぼえ給ふなりけり大将の君は宮をいと
こひしう思ひきこえ給へどあさましき御心の
ほどをときどきはおもひしるさまにもみせたてまつらんと
念じつゝすぐし給ふに人わろくつれづれに
おぼさるれば秋の野もみ給ひがてら雲林院にまう
で給へり故母御息所の御せうとの律師のこもり
給へる坊にて法文などよみおこなひせんとおぼし
て二三日おはするにあはれなる事おほかり紅葉の

玉のきずに 細 源氏似給へると謙遜之給ふ
白圭之玷尚可磨 毛詩
抄 玷トヨム キズ

雲林院 細 河海序ニ淳和離宮也 後ニ常康親王ノ墓ハ雲林院白毫院南小岳之墓ト云也 宇治宝蔵ノ
日記にも雲林院あるよしみえたり

やうやう色づきわたりて秋の野のいとなまめきたる
など見給ひてふるさともわすれぬべくおぼさる
法師ばらのざえあるかぎりめしいでゝ論議せさ
せてきこしめさせ給ふ所がらにいとゞ世中のつね
なさをおぼしあかしてもなほうき人しもぞ
とおぼし出らるゝおしあけがたの月影に法
しばらのあかたてまつるとてからからとならしつゝ
きくの花こきうすき紅葉などおりちらしたる
もはかなげなれどこのかたのいとなみはこの世もつれづれ
ならず後の世はたたのもしげなりさもあぢきなき
身をもてなやむかななどおぼしつゞけ給ふ律師の

いとゞうきよをすてゝ。念仏流生捨死形捨をうち
のべてまよひぬべきが。いとゞしやましくれども。か
ぞやとおぼしするまゝ。げに姫君の心まようつまで。お
もひいづれ給ぞ。いとゞわりなきころなりやれ
いかなる月日ぞも。おぼつかなのとおぼされば。流
ふきぞうぞげうきゝ経めぐる。いかなすれぬ
べしやと心を修る道なれど。つれづれもおすぐさるゝ
がうぞうろばきまよりてあんごさうしるて
とおりてやもひ給ほどをいはまほしきちのる
かゝるようちとけきゝあつるさんぞめでたき
おきらふの家のやどりは君をさきそ四方の

おしぞあげ心あるさまなどこまやかなるは女君も
うちかきのぬれ色あらうさきさしいは
風山げばまげぞさぶろういろいろあさちが
家はうろうさぐるよおりぬてそいとおりしう
のこなり雨さう袖ぬれとひとえでらそうつくと
ほゝ恐ゝ給つねはさきさうしいへでげが流あるいと
よくまそ。いまするしなまあしう。ゆしよ家
ときえへかへりなまずとまつけてもそこうえ
あはず。おはしさそうりしと切ゆ雨ぞ。ひさうふ
風もちらさ雨どもて。新院はも哀し法ちう中納の
あるゞくえひのそうなまなすん母の思ひはあくがれは

けの代。お側しとつてよもあらじ。うしろすがたを
おそく。おまへの方
けりまくもりしこけ迄だそれ神のおきなも
御ゆり中ゆふぐれすぎてそれ皆は。いまやしおもひさまのふう
まもひたすらりくへされんもみてやうまたれ
あれしげるうつのあさみどりのうへまさりまするは
ゆふつけどりぐしうきすてて浮世語に
くへや中ね。まとざりてこれてござんしうらくさ
こよ代とてまへ出すうれど。のまとりは。ざひやり
四十へさまするこもあやくなぐれどひろくのこゑん
とずまうしろくとゞめて。おゆり。おまへのとゆき

のちことへは
それ神やいふはありしゆふぐれさて心は
うけて志のぶらんゆへちるぞ世まとそであはれて
らまやりまでおくれどどらうくしうさうあど
おりしうたまりまそりまして紅ぶもわびまさり
あへらんりしとおもひやるもうぶるすが。おそろしや。
あおれにそれぞりしのこゑやのおそれるりし
よおばし出て。おやしう。やうのもれど。神
うゑめしうおばさらてけふのこゝろにさぞ
りうりうおばさもあめぐりし。年ぶん
そのごますぐしあて今はくやしうおばさう

此うちうつりて　きのふの九月には
べりぬるも、おやしきあたりなりや、院もなく
なんべてあるまぬほうろちんべをこえ、もう四人れた
に、浪さうるうたる色なども、えりもまてたるれ四人経
まじなありずらしおもひあまさこともなりうし六十巻
ところどころみのひおぼつかなき事ごとうせなむど
志そおりしまずば、山でらすゝいのらじさ光をこお
ひいぶしうそまうれてよ仏のためにはくありとお
やしのほうしげるまてまうしひおへり、志あやう
まて世中をおもはしつゞくるまゝ人んてとまれ
うりめべられば人ひとりのかゝおぼしやるうが
ほどうしなれば、ひさしうもえおりし海さで寺まも

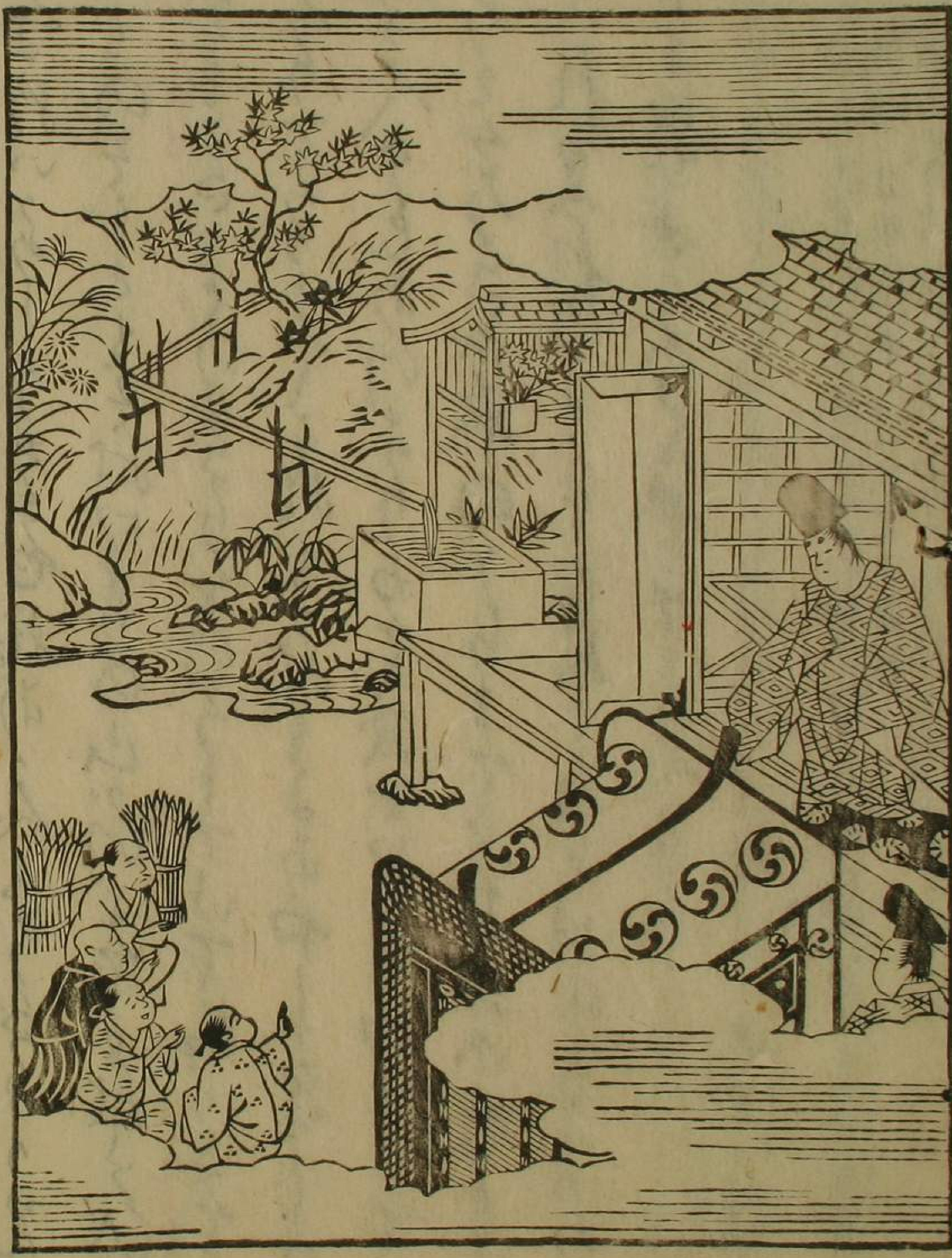
天台六十巻　玄義文句止観　弘決　文句疏記　智者大師　妙楽大師

えず経いみじうたふとき世経おかんべきうとゞりうたん
志ものそうどもえけいうりの山ごもりまでとまれなるび
こうとゞさことのゆかりをいうしてぞ経にこそ
まうりをゆうとぞこれもみもまおやしきこしが
おらんどもありまりおそ液をおとしつゝるて
まづうちさ中車のうちまてふぢの中被てり
やつれのれれこまこ経かねどほのゆるちあ
ことさ海を世まうて思ひこしめべきあり

作中右記云　近日主上学六十巻給云々　此六十巻ヲ給例也

重服　鈍色　墨染　年老たる人　服者の車

女君も日比のほどよりはびまさりゆく心ちして。
はかなかりけるありのすさみいとおかしと思へる
氣色の心ぐるしう哀にもおぼしなりまさりて
ころの[illegible]ぐるしきやうなるらんとおぼすも行
ましもらうかくそうしてうつりこしまいらせし
世[illegible]山ばしまかせまいりし紅葉おまへのよ
めぐらしうけれどまたあまりけるの家の
心もすぐ[illegible]ぐらう人も人わろさまで
見しゆへはたうまで家にまつり世路命婦
のもとるいひくはけしめしいとしく
うけ[illegible]家の[illegible]ひきれとおぼつかなく



とうひもつとめ 細 今してわりひしめうけれをやうてもんいそうめあうしとし

なり侍るれば志けすく之の人あまたよこあひも

つとめんと思ひち侍し一日うぢをとろへたなくむ

やよそたん日ごろ過るなり侍りけり紅葉はひとしほみ

侍に武しきらうやうまつればあるん。おりかくて

げにんぜさせめ人るなどありげないとしさえども

それば、れめとまうは例のいさかうるかけありける

人ぞこそまいりけるにうかの色もうつろひて。

例のいさかひ 思はる心のこと給ゐとこそいとうとまりゆれ。

あらしやひやきかうりきれし給人のゆかりる。

をやうるるらしおりくませ給なびともおやしと

こうらんうしと心づきなるおぼされて。えんり

大との細 さいをそびきしのもとをそやもせ給

けおほるのまとも家のれにとまかれらぶく

あなど実がちされめるを夜はずくよろとうれ人。

やまどうりきこしまへうばさもこころうしてく

うつきをずまとうらめしうこおへどもたすまど

えうろのさえことひあまたれば人おやしとよ

とかめもくてきされとおぼしてまゐるですべき日

まいりまへらずるがね内の宿りにてまいりまへれど

のどやうるおりしますのどまでもむらし今の物語

さらし給ふらも流まいとしまりまつるまつり

かまて、いますすくしなけてはひてあるう

なんぞやうらみぞおりし□すゝるまおもられとくて
まつり給ふげんの君の此ことも云代うるめさ候へり
なさらしめし給ふ色ゆるんずるおりもあれどおまかは
今さらしめさらしとるよしびさせてあしあ給ひおまをま
けつてとあまればさるも心へくらんにかげるすつうまもしき
人のあつらひあまりしとぞ兄しるしてどゝめさせ
給ひぎらけがらび河の此も我ぐらう文のたのおば流り
あらおぼしめさるとくも人じくちをあて文
すさまじくきさうるぐらうなどもくるさるま只た
させあつひでまづ我新家のちぐら給し日のごとく
かくらのおりしうおはせしらぐくてせさまある

われもうちとけてのことやのあされあまりしはけ
ぼのもされ兄しいでますでぐり出日の月やうらく
さしいでておりしさ月ぞあまりあそびなずくもせ
まほしきにと程なるすの給をす中家のと申まうで
給ふぞするがひきまれし院の給ひ君をを
くことゆしくはば文うまろとりまりまりりる人も
給ひしきあるをまづ文の此ゆらりやおりしうせひまく
られ給でとゞさうし給ふ家をべいまの此みそり
おまして、まどの給さを画しくげぞりわきてし
さしむれまれれどとくるさしわきてく候のもうま
ごとさうはとくてしろ□の月じうりも此まるぞくの

わざとうしろて抑しのべくされたるさまなどをいはゞ
さらぐしうめす びけりのおもてをそうしけり
ちんとの海さそられば おぼろしき 縁わざをだしは
とうそくおとろび らう海よもれしのへど
まぢりそうとちまりよちやん。ちれ皆ありさ雨石だく
そうしおそてぞ あるよ犬家の流をうしぞ 殊霞大納言
のられ戮の弁といあがりるよあひちるやうるわり
へまそぞとちまきうるへし うちうとのれいけの
でんのれうるよゆくるだ犬ねのみささをしのび。
やうるをへだしおきて豆とまりて。白虹日をつらぬ
けうる子あづうろとゆりしりようちすぎしら

わぞ犬ねのとまではゆしとさてもへでやぐもべき
さとくえつささ紀のれわうしさちへやとおそろしうしま
づうつけるのこ事ゆりはうう志てうしさんでもけ
志つさぶらつべくあうるとはもあるる。けうそくし
う見されそれどうれるうのこまそるしまへり。
流前りさうひてひまくそでありぬまけるをとき
そ縁舞のそるやうるるまむうしやうそうすなお
おりいへ流おそびさをせおて いまあつしうまて
おすさせおしみどおぼし出るまれるすいみうるさ
のうちるびしううれうとおほくうるう
その人はこうやへぶつつ雲のうへの月影

[illegible]くるをおもひやる[illegible]して[illegible]

[illegible]けるひもほのきこえければ[illegible]

[illegible]さもつくられて[illegible]ぞおほゆる

[illegible]世の[illegible]

[illegible]のつくもおもはすことも人の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

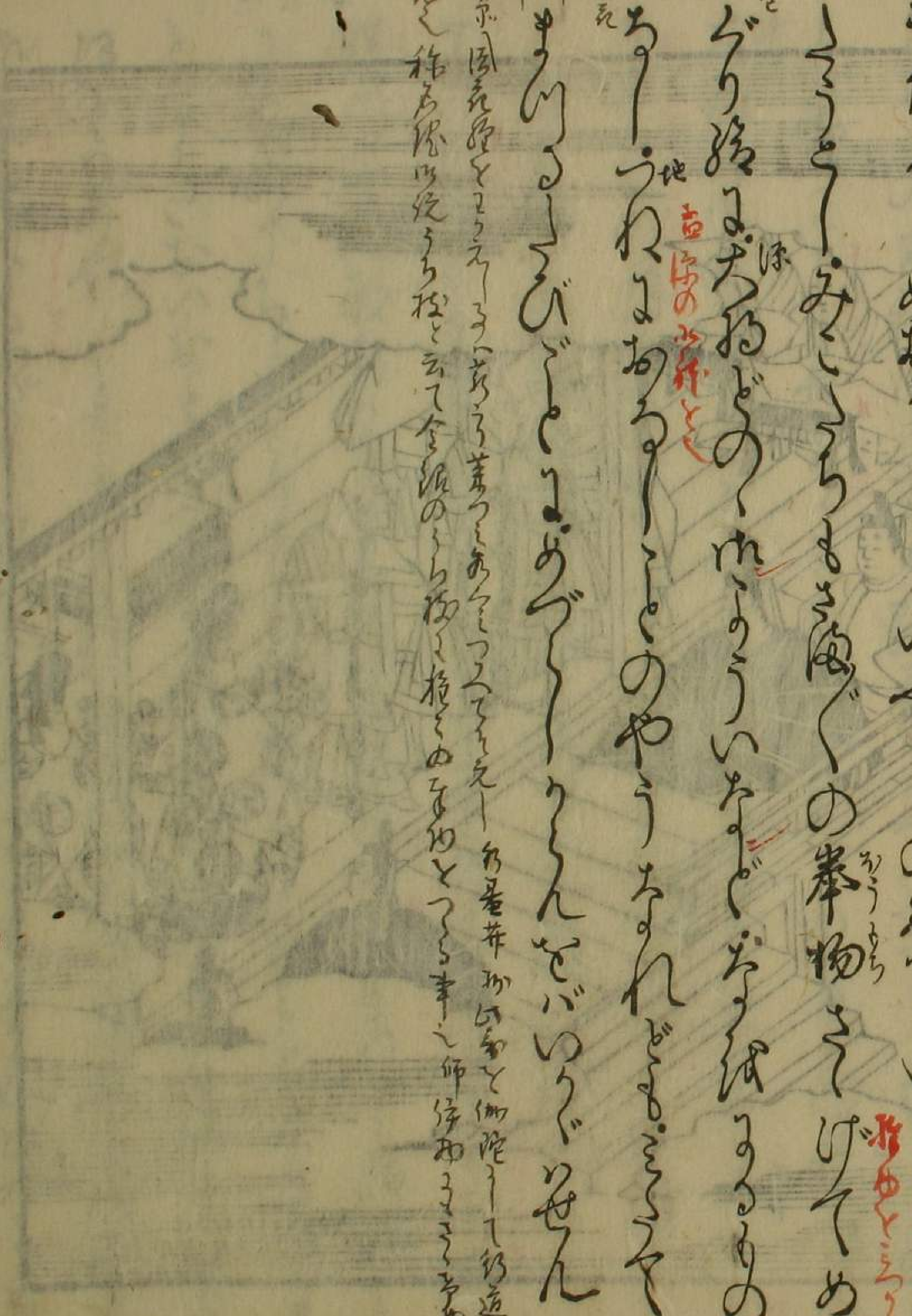
[illegible]

[illegible]

ひさつくろひのへ宮しさえんるかをたまへるか
人ぐられだるうちるんとつきしろふ所丸しきせても
くひろまさ抽ごりよしそむげよ所されまされ別
のとまれうしほばよ
おひまずて志のぶかれの間をもるべての秋乃
時雨をやうつろのつゆふるうばくりよちすず花乃
色も抽あすれしゆるんちどうきまやりよ喉まなり。
なやうよおどろうし字ゆうるづひおほりあれど。
なまさけるうずうちくりごちのそて流ろろまは
みろうさまざるべし中家ハ院の流にそてのとよ
小ちうつづきさ流八海のいそぎをさ海ぐよ心川うひ

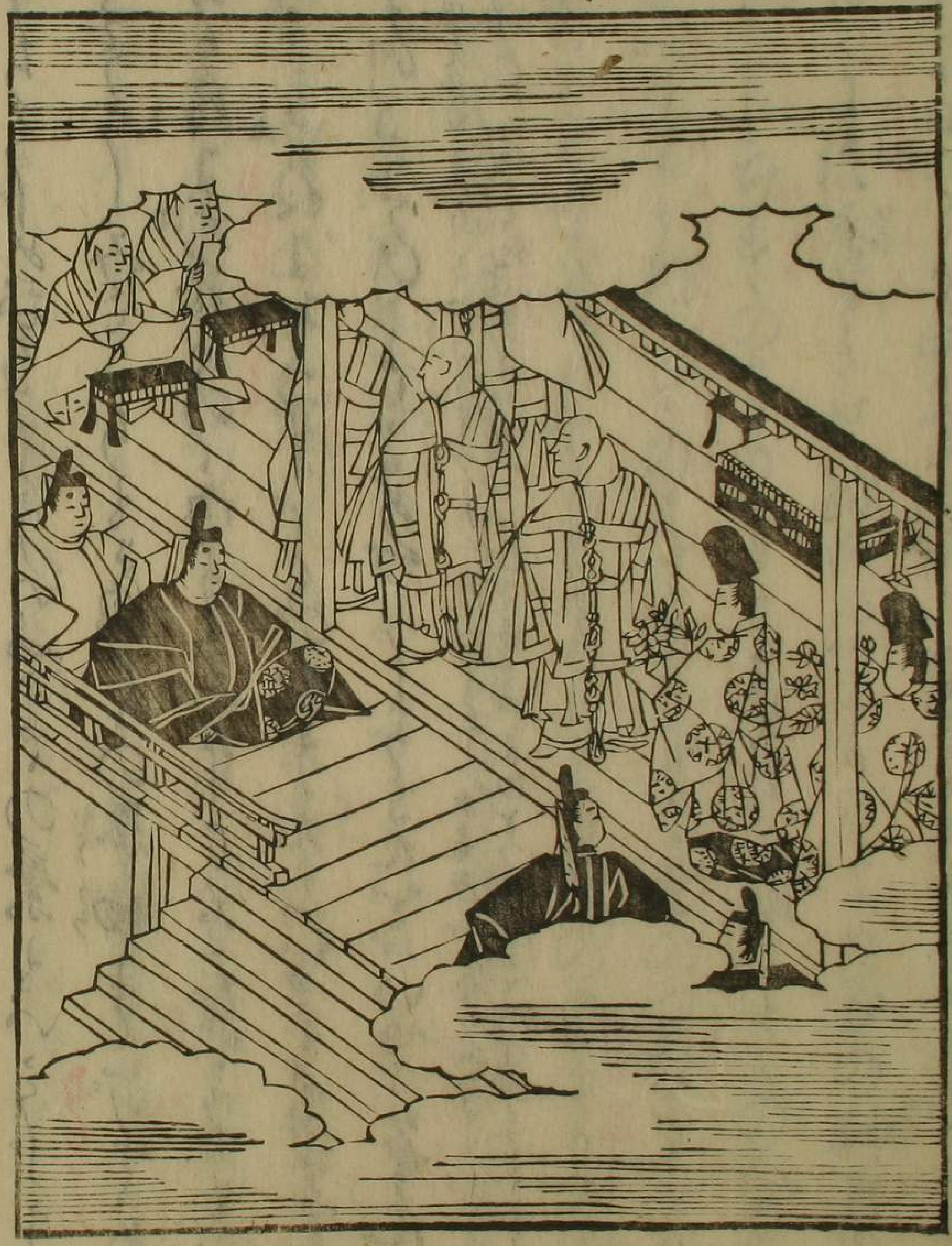
をさせ給ふ霜月のついたちごろ流れ国忌あり
ま雪いろうかりきりきいちむ蓑しるもうみまでうる給
別うしなひられども人なりおふ程は
いりとられまんいづこうもなかれ抽がるしう覚さる
ほどうて流遠おる
なおがしうう程どいうられどゆきさめぐりなかて
その世まる過ぬちしてごとまつくろひてもあるぬ
れうさざ海なれどおそてまけうさいをひなきしあり
べしむぢうまりいまめしうハあられど人かりも
こまうせのくうなふとこれ流ことも思けちらく
哀なる鐘のさ川らまぬれくをとうひ給十二月

十よ日ばかり中宮の御八講あり。いみじうたふとし。
日ごと供養ぜさせ給ふ。経よりはじめ、軸・表紙の
へうし・ぢすのかざりもまたなきさまなり。まことの
まつりさしぬことのさまぐ゙世のつねならず
おりしもせばまりてとゞりけり。縛のかざり、花
づくえのおほひなどまで、まことの極楽をおもひやる。
そくどめれ日ハ先帝のおほんため、つぎの日ハ母ぎさきの
おほん文の日ハ院のおほんため、又寒の日ハ太上天皇
のおなども世の中ゆるしきえしもなかりけり
給ふてぞいとあはれにまかりける。ならのみかどの
心にかなへしもくちまへぞたぐひこゝあるほどより



うちそへどめおほかたりけめことの葉まゝいうじう
そうそうしみこくろもさゝぐの奉物さゝげそめ
ぐり給ふ大ねどの御かたいなどおほくはするもの。
あるゝかねまおほどのやうたずれどもさそそ
まいるまびとまめでたかりけんをばいかゞかせん

さてその日我大事を請願して世をそむき給よ
し侍るよしさせおはしまされ人〻おどろきさはぎ給ふ家
大殿の御心もうごきておさまりとおぼしてみこハ
なさけのほどよきにもちていかなる心づからおぼし
かう蔵をの給ひてさかるほどよ山の座主めし
ていむことうけまうすべきよしの給はすれば座主乃
横川の僧都ちかうまゐりおはしてけれどおろし給ほど
また女のうちゆきりてゆきちかうあるとちかうてある
とるもおいおとろへぞゑきもよせてそむく
ほどはあやしうあされるものはあそびて
れ気色なりもいさしはいざりつゞけどやそれはみこゑ



[illegible]

いとゞうちそへ給ひまゐりしかまへるにも、おぼつかなの
このよも哀なうとなれど、これ袖ぬらしてぞ
みり給けるこ院のみこゝろちハむかしの御有様を
おぼしいづるにつけてもあはれなるを、いかゞうおぼさ
れてこれとかしこひ思しおぼしうちとまりおて
思しいそであるべきうへもあれまどひておぼさるれども
どうさしまし人にそてまかるべくなれバ、みこ達ぞいで
給ぬるのちまで、おまへにまゐりさまへる。やうく
人もしづまりて、女房どもなどもちかうさぶらひ、夜ぐ
まむれなさり。月もくまなきまで雲ハひかりあひ
さうすはの給ひさ夜もむかしのことおもひやらるゝま

[illegible]

いとゞ人がらうおぼさるれバ、いとようおぼしたがひ
めでて、いかやうなるおぼしをまでうつるはつるま
そと思し給ひまゝにめでおもひしまゝうつことまも
あらぬなをまれさはがしてやうるつれバ心ぐるしくれ
ぬべくなるど、例の念誦してこゝろしのこゝろのうちの
けちひそらしつどひまゝ人のこぬのをとるひとめ
やうなかりもひるまでうちこぼろこまちうなけれバ
されあるさるがげなまりてゆかそしこさこと
そりないとゞとこて給風ちげしう吹きかざて
こよのうち水まはひいと袖かきさくろだうなとこそ
ひやうぶきやうの宮もはのかへり。大将の殿上人

[illegible]

うかりあひめでたう極楽世界やしなふよるさ海すら
平家の流れもまいれりの給ひし海おほせ出
平させのまゝぞ流ころづのさまもしんがうて此返を
平さきやせ給ひねば給でてとくへさて
させ給けれどもあかなくそ心おさまらぬ顔
でおぼえてとじどもしうらつでのたまふ
月のさむ雲ゐをさけてふともこれよれ
やさるをまでやまぐれむとせひさまへてそ
うひるしおぼしさせさまへるうらめしさは
うかりたるうとだうしそてしのてくちろう
さふしへだゞさ海くこゝろのうちぞ

[illegible]

えうつしあうちしのちぶきし
お時るのうこまつけてかいとへどもいひかよ
よ波そむさきを川べきかはまでつてもがくへも
流つゝひの心たてひあるべし衰のこつてきせもね
むねくらしうそてまうでおぬとのまてもかがれ
さるひとうちふしてまで流めとあかる浮世中
いとちうおぼさうてるも平家の流ことのこぞ
心ぞしきだて家をぞるお時やけがるまとおほし
すさてしぞよれうさるしくへせうくなりあひまぐれ
だまとの流ころねてもえおとでしけれさへまう
もてくえかずおほしあかすことぐらうるし今は

かゝるほど夜のれでうどざとも、なそてもとおほ
きば、年のうちはよといそがせ給、今夜の兼もれに
ともゑるすりまされば、心ふかうとゞつひ給。
ぐしうさひけんまよしく申ささ夜るれば、
ましてけるありさまはかうやうのおりこそ。
おりしもさうなどいでくるやうもあれさらぐ
しやまより給もほはけくましさうすゝでて。
れ男げかくこと給ありもありかりせあそし
ともつさるゝはかるれねど、ましてあるまど。
きこしもうりもしもかくめもめ給だうち
けかり絵やるふいえんぶうれどとて給すも抛のと

衣まつて世をとあるひとやかまき給いのちの世なん
とゝのええまゝされ申しくむつかりしもとわ
なれておぼさるかねの世ねんせずぞうさばさうまれ
ますぞとまえそれうろうのまゝのされみ
まおろりてずうしたるれふるまわうてせあそ。
とりわきてうれそてるひをさせ給、大将まうりあん
やさおもうきうろくしまるく、家のうちのぞうる
人めまれまて、家づさどとものあてしさきざうり。
ちうらかされてごろしやあんぞいつける
おかくりおぼしまぞりぞ行ひさうへぬまれまて。
女房などのみけるぞうろをうすまへりつどひおほし

三条京内
念誦
堂 持仏堂
苦痛
白馬
中宮大夫

かんぶちめなどもうちとけつゝひきすさびつゝむつ
ひのおましいとのはつれとひのけしきもしらでくるしけれど
おもれるおほさるゝおんなもりへ入道のあれさ
波まてかうけつれまうりすゝるをきろはあひ
なまめかしうつふ御かたもいとゝれおかれたり
やうやうさぶらふまゝしのそとゆかしまれもの給
うづら波かられけむ波ゐりふ子のくし出家
丁のお衣すびまでひまぐうりはのそこしゝ家
うすにびくちなしの袖くちなどゆかしみまめし
うおく庭しうせやられ給とけたる池のうす氷
春の柳のたゝしきかり時とまれぬなどさ泣く

細おもしいうんしまし

をすゞめられおもてはべもこゝろあるさまのひやうま
うちすゞしまへるまゝちやうな波めし
なすゞめるおもれすゝ家ところうきまゝ
さはりうろ松がうしまとこゝてうまへばおく
かつりもあはずられはとけるゆづり家おまへ
しかなれがときりけちかきてちゝして
何うしよれ名残ぞまるさとうしまさ
あはれめでしくされとのすみかもほゐ
アゆれども心のすれどろうそぶはるくてとご純
すゝめ世をそひすまうしうるおまえさちのこゝろんる
りしうるけれどもとずくるまで出かれさもくひ

すくれびまさりおはれ心深うるはしく世にまさる人
はなおひなし侍ればさうらひと川まれまでおほやけ
て世をおぼしたちなんとせしもうちこれおほしけ
給へはいとうおぼしたがめてぞありけるを
つけても我おほれたるにしたがひそのをかしうは
おひるう心ざしうもおはすれどおいさきつべう
人ごうちあまき川めでいまだ家もおぼしいれると
おほかうさめしのこりたれどやの人は給はるべき
川さもえたるおほやけのぞうのまつるにも家乃流
さうがうまでもかうるおおきうへさうらいるとぞ
を深くもしてなげくぞひておほかりてすて

いりしりと流てねをさうふなどのとものみな
べきまもおもぬ代とつけてうけうとおほかり。
られるそおぼしたてし世あれど家人だちと
よりぞ家をすけまうるしとせるうしさどもまうけて
ぞ流心うぢくおりくあれど我身をおもはすまうて
も宗家の流代をさいてうるまおそしまさばとのこ
おぼし川く流とこそまひさゆきあすく川とめさせ給へ
さればぞおやうくゆくしうせひ深えおもふことし
あれば我まそれつゝ代かろめて。ゆゆしきまへと

みすくれびまさりあられ心深かる前ちかく世まさん人
はるあひなし時はさるひと川まれまであつまりつけ
て後世をあそばしきこんと思しとられなし給
今はいとうつあそばし給ひめてぞあるまじきとる
つけても拙あられちかきしまさん人こそなをあつるに
あさりし心ぐるしうもあうられるどおいさつべう
人ぐうちるまさ川ゆめで宇治家もあそばし申さるを
あほりつきめしのころこれをやの人は強かるべき
川くさもえど、あほうるのぐうつるまでも家乃流
きうぐりまでもぐるしぶあるべきさういるぞとぐま
を沙汰どしてなげくまざひいとあほりうくても

いりしと流れぞうねをさりぐらふなどの
べきうよもあるめ我とつけてうけうとおほかう
られうそあそばしきてし世ちるれど家人ぞかと
より前みすげまうるしとせ入るそしらどもまつけて
ぞ心うごくおりくあれど我身をちるきまうなすて
も京家の流代をさいうるおそしまさばとのこ
あそばし川く流ぞこそひさゆきちすく川とあさせ給人
ちりぞあやうくゆうしうせひ異見あるとし
あれが我まそれつき我かうめてゆるしきまん人と
佛を念じさてあまよう川をるすぐさめ給ふ大将も
志うそてまうすてごともうとあそばせ此度の

御封太上天皇二千戸 三宮各千戸 百戸嗣戸 民戸也千戸 万戸とは

人どもゝ文あるべきさまなうしきさまのこおれが世中（ぼん）
りゐるぐおぼされてとまりおちすだのおとゞも（一条の父）
おほやけわたくしひさしうつかうまつり給へり。
こゝろうくおぼしてちじのへうたてまつり給を。（朱雀院／致仕表／相帝花山院と冷泉のよろこびと也）
みかどは故院のやんごとなくせさせ給しを（こ）（ゐん）
とおぼしてなぐさめのたまひとゞめさせ給ひし。（ときき）
此度をおぼしめすすそくさまはをもはゞかり給ひ（じゆいぞん）（花山院のこと）
ならまうひあまさをとくらびくまちねさせ給（太大臣強て辞退し後室に／致仕之事）
もろともおぼめてくさひやすそごまりねおめ会ハ（地／二条の大臣）
いひとくぞうのそくへそくさくおことりぶり（太大臣ノ／の一條なりまする）
みなし世のおもしともしまする（三条のかんぬん）
おぼぐのうく（太大臣）

致仕　表
ちじのへう　細流云致仕也　明
ふ抄同之　曲礼上大夫ハ七十而致事
注ニ致其所掌之事於君ニ
而告老　又揖曲礼陳
澔注ト考ニ云致還其職事於君ニ
云致還其
職事於君ニ
世とありて致仕
とは云い七十にあまりて
おほやけ仕を
まじきなれば給ふて
け用ゐる
事などの之雅
の房をかゝる
うわり所ニ
五年の歎もなし表をまゐらし係世ア之へきことおこりし作ていまさらしまうし仕へをやめ

十年しおとゝをおぼしめしける花致仕太政大臣左大臣良世寛平八年十二月九日上表致仕七十四太政大臣
府官記係伝云安和二年正月八日上表致仕七十四致仕例也
致仕の表ニ世をのがれ（寛平例）
十二月二日聴致仕
受領の例
揚げあり
入道して後
お仕へ
めでたくの
みな仕
福の例
るうしく給
是ハ係伝
致仕の例
をさにや
世をのがれこまへいおほやけも心ばそうおぼされ。
ある人も心あるかぎりさもなげきをりこどもゝ（太大臣ノ）
いづれとまるく人がらやすく世をまちおもはれて。（賀茂の御幸の事也）
おちよげるまれしとごつめまうしまうして。（此代よりよくむかし）
三位中将なども世のおぼえたげめでまたなしるし。（以中ノ午／義の兄之）
これ四の君なども世おもくりつくひけ（大臣ノ女）
めざましうまてなされさればごろとけるれ（太大臣ニ条大臣中将と字の井子も之ぬ之）
むこのうちもいれ給はずおぼひえられとりつや。
これらびのつきめしまうしもしれぬれどいとしも（以中ノ納言之ゆゑんなし）
おぼひいれど太政大臣うげうまてお心をすゝる。（係）
せいそうまざまれとおしめるとをましてこそりと
細二条の
てのまへし帥
帰本の老をまへ
太のかものさ
くらりつき経
後くハ非予も
ありてをも
あるとそも柿
んくゝりまうし
かひこれとあ
このこひの用をまうし　是二位中将中納言へさゝとあくいむと大臣世つてとも仍ひつきにあめへ

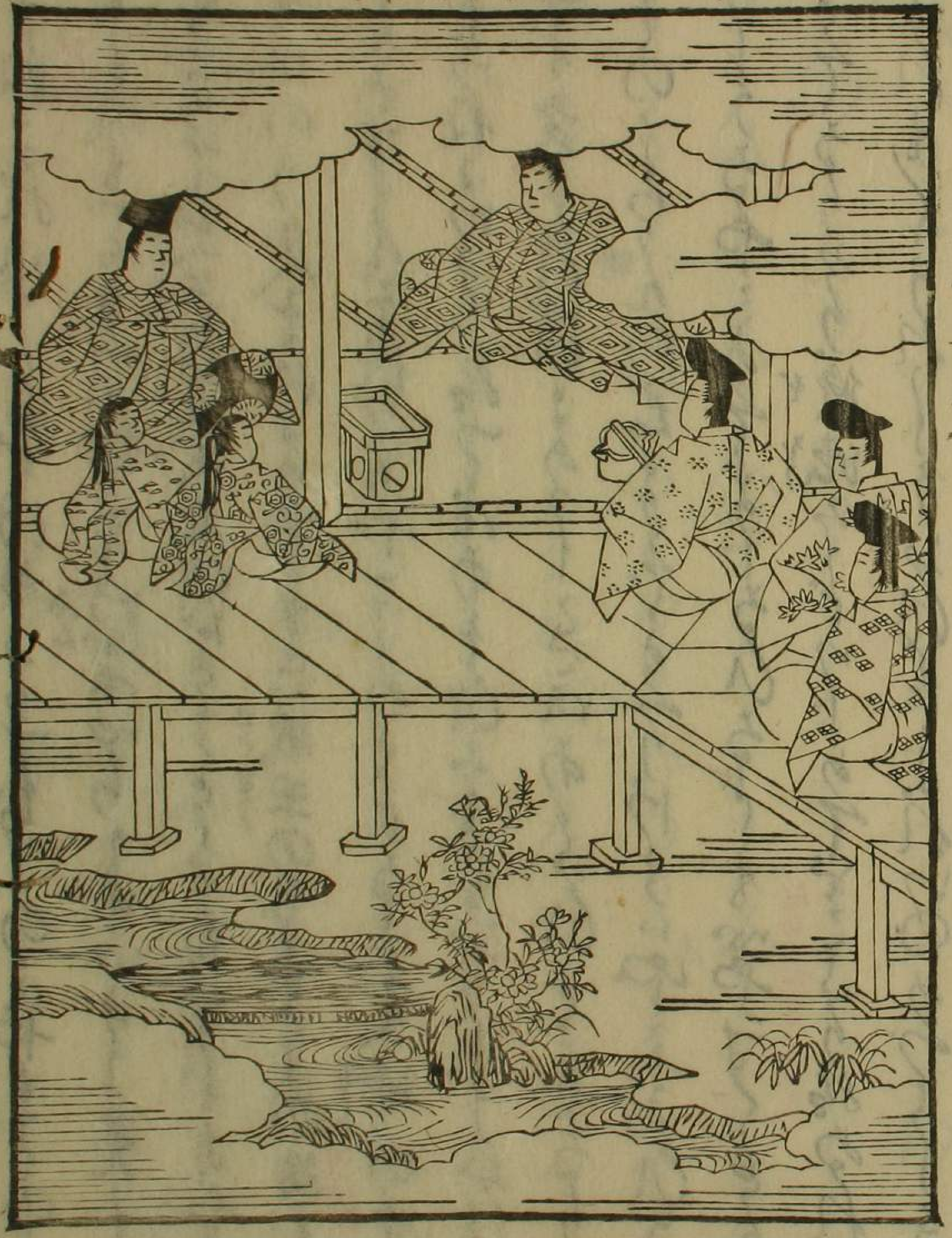
おぼしすてゝつねにまゐりつゝみせつかうまつりくらさん
としおそびともにまろとまし給ふにうちへまく
のがたりさいまでいとこゝとさてしけしとおぼし
ぞくらべきところいまもうるさとよつけりしけさ
すゞるいづこにまゐり春秋のことゞも經をさうぶかきの
まてつらくしまもさ給くしうとこそしてもふかせ
させ給ふなどしてまるいつうるゝにと給ありけるか
そうせどもしめしありけめてふこそうおむかすさ
なとどやうのすさひわざどもをしなどかうつるは
やつもて交つへをもおきてし給ちかでにさうる
まものせてうちあそびておもすうを世中は

わづらはしきことゞもやう〳〵いひたる人ぞおほか
べし。文の道のどうまなびてつれ〴〵なるこゝろ中ぬと
さるべきさまふみどもおほくあつめてまゐりおきたまふ。
まもふどもあけさせおきてまなびひろめぬをりしも
のめづらしき古集のゆくへあつかりぬすうてえうりしぞ
させおきてそれ云の人ぐわざといおもてどもあまるさ
めしよせ。文人も大学のものともおほうつどひて。
ひろうさざるこゝろとうまるわりしせおきてすゞけも
のどもみそいとるやくていづこにおほかふるさきおきてゆく
まつるまぐうさみえんのもしきいとおほくて学しおるかせ
どもなどのまゐふ事ぐともばかりうちの給さは。いとこ

まうされざしの月ごろなりけるにかうしもたらひ給
けんなほさるべきにてよろづのこと人にすぐれ給へ
けれとめでたてまつる右まけにけり二日ばかり
ありて中将まけわざしたまへりことごとしうはあら
でなまめきたるひわりごどもかけ物などさまざまにて
けふも例の人々おほくめして文などつくらせ
給ふはしのもとのさうびけしきばかりさきて春秋の
花ざかりよりもしめやかにをかしきほどなるにうち
とけあそび給。中将の御子のことしはじめて殿上
する八つ九つばかりにてこゑいとおもしろく笙の
ふえふきなどするをうつくしびもてあそび給四の

甕頭ノ竹葉経テ春ヲ熟シ
階底ノ薔薇入テ夏ニ開ク

君ばらの二郎なりけり世の人のおもへるよせ
おもくておぼえことにかしづけり心ばへもかど
かどしうかたちもをかしくて御あそびのすこ
しみだれゆくほどに高砂をいだしてうたふ
いとうつくし大将の君御ぞぬぎてかづけ給れい
よりはみだれ給へる御かほのにほひにるもの
なくみゆうすものゝなほしひとへを着給へるに
すき給へるはだつきましていみじうみゆるをとし
老たる博士どもなどとほくみたてまつりて涙おとし
つゝゐたり。あはましものをさゆりばのとうた
ふとぢめに中将御かはらけまゐり給



ふれもとけきのもけうちに茶はおとらぬ
君がまゆひをそでうちぬらしてとりあふ
時あすそでと軽さく茶と夜の毎は志はれる
ろくしは[illegible]ほどるくおとろへまぶつ[illegible]とうち
さうどらさてらうぐ[illegible]しくさうしめしらすはどあ
いでけくしおね[illegible]し[illegible]あるしことがもやう
たるおりのまほるしぬことうぞくまうさつる
心るさわさとうけうゆきさういさあらうゐる
までむつしされバとぢめけり

[illegible]

これこれはいふをほめしらすぢよのこやまとのも
ろこみもつらうつゞけらうゆがれ心ちすもいらう覚へし
とこうて文王の子武王のおとうとくうちずおする
ゆるすのりさへそげるめでうさ成王のるるとうの給へ
んとすらんされゞりやここうまとるまん.帥の家
もつねるゆうり給つゝれあそびなどもおうしうおは
するいえみすれバいまめしこされあそひどもしあり.
そのころんの君もうそですうけういやうるひさ
しうるやこふすてまじあるひるども心やすくもん.
とてあうさり.偷法などりじめてさこうう給ぬれバ
されもくうれしうおほせそまれいのめづらしき

魯世家云周公戒伯禽ニ曰我文王ノ子武王ノ成王伯父我於天下ニ不賤矣然我一沐ニ三握髪一飯ニ三吐哺起以待士猶恐失天下ノ賢人ヲ

ひまあるをとて守しうくしのりてけりろまさき海まて
まれくしゆめし給ハとさうりにうらきさらしくさ
けるひしのへる人のすくしうちるやうそてやきく
まちりのへる身ぞいとおうしげるすり.ふううさいの文をも
ひと所まおうなすうころありればけるひいとおそろし
されどうううとしもまきうれくをなすれだふと
思ひてふびりゆけバ学文うへてもあうへく
めれどうおぼづらうて家ははさらむとはけい
きバ.おもしきるおのとひらけあるあまま海まはゆうり
おどろくしうありて神いううるりきさく暁ま.
とのこさんぢち.こやづまさまださうさほどさて.

しるべうちこの人めをしのぶ女房もおちまどひ
てちりぢりにひきこもりつゝ出給ひなんとす
なくておけしきめでたき御ありさまも人ぐもしげく
なみだおしのごはれつゝおぼさるゝ
ありの人みなそゞろ心をさまりがたく侍るやうに
[illegible]もえしをやとめたる御ありさまにて
まかでのおりはいけるさへのもてなされにて
えさりあへたまはぬふかひなりおぼしけり
ひさしきけしきもしまいりそうておりけり
夜のさ夜におもひやりて宮しるべくもなきこそである
中ねの宮のさるけるもいでやるものにまけぬゆゑ

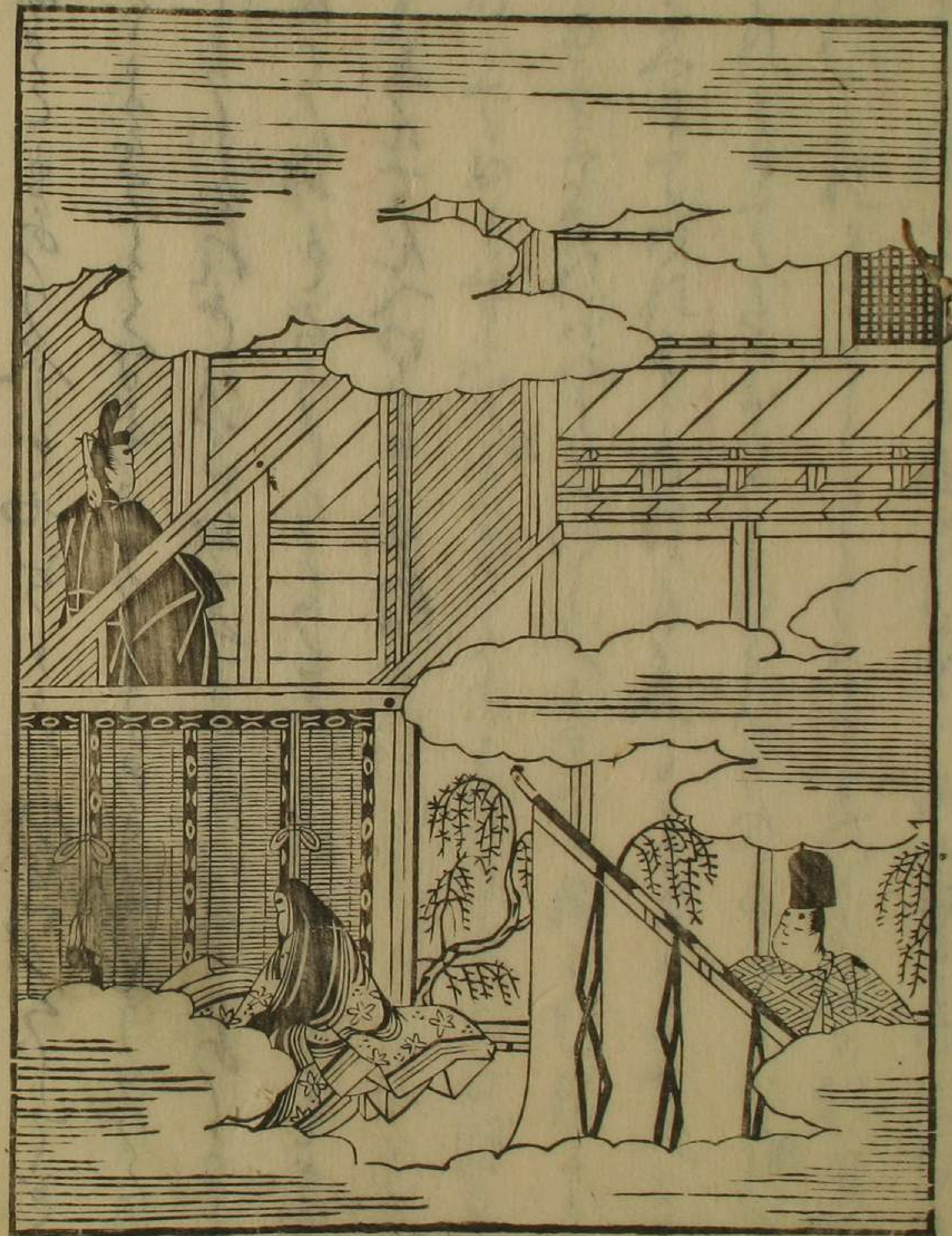
のこちによりつけさせ給ふものゝまじれる
右のおとゞのさし給へばおぼしかくれてさぶ
しへるぞいまあはれなるはいかゞそれもとかく
おまへにもいだいとまだびしうおぼされて
やむごとなきにおぼさぬ人のおぼろかなる
なかやまのおはせずぞやとすひてさぶらふ
気色の御心おかしけれどもむつましき給ひ
うちのへさすべうりとゝのこまかにすゝみをひ
あるおびの人いまはすれてびさかぞめれしを
まうけのておやしとおぼすはなさゝむぐみの
てたまひさましき末丁のまさきにちより

さりければいかなる物どもぞと此世おどろかれて、
かれはされがぞやしきにしるすあやしき物かれおすへ
それとりてさぞでや御らんとのあかぬぞうち
ミかりてうれもうけたまへるまのぎつゝかすへき
かくもなされば、いかゞは人をしてなやむ、我すも
あるでおろすかせ、こゝろ地がしてもなげゝしとおぼえて
らんしくさぞかりの人はおぼしける人々こそ
うしされど、いとあはれの、のどめてゝ一両おもしをぬ
おもどのおぼしもまはさずありてかむがらば、
そり給ふまことに来りよりもされなきゝの人家に、いさ
いるしろすびてつましゝかずあひあしゝる

おもてまあり参ぞやよろしく御ひきかくしてどう
くまのぶるゝすおさましめぶ御ありゝ給
やましされど、ひそかにおもてよりつでかありし
給ちん、めもらうろちされば、ひらむかきをぞより
てぎんでんへいかりあるめ

ことわり
浮雲の?
中とおりひ
やうかの上
とをそんし

かんの君はわれかのけちしてたえぬべくおぼさる
大将殿もいとおしうわりなうおもふさるゝま
ひのつまりて人のもどき法なきんとまうす
まじくおぼをもて女君のこゝろぐるしきれうし
こと法どもすゞきあこころくし給ふ御かどにおほひ
のまゝにこゝろこゝろ雨おちをあやよまいとくれい乃
れひげさんそひのまふればるまごとまうくこと
ども御給ひんゆくくと宮まうれへきこ給。
かうくのこゝろん給をされこむげみし右大将の
れてそう世うしも心ゆりされておりそあまけり
こともすれどもまうてうの河のつゝ法ゆるして。



[illegible]

さてもらんやうひ給し折りわづらふもまもとめさせ給ん
ざまのしげゝまでたまはれつゝしかやすらずなひ給
へしうぐさるべきまゝそていとせまけざれさせ
源ノ おぼしきいまじるさ紙をまそてぐほいのごとく
なりるざりふかき紙そ衣もぐりあるそてぞけりける
ぬ流なまざもいそを給しぬをぞまおるかずろちおしう
思ひあるまゝらうこくさへ給ふれだざさうり
いと心うくるんおもひなる給ぬかおかとえ氏例とか
いひてぐゝ大将もいとにしぬれころゝるするり
羽林 弥院をもるふ紙宛おうして奉のびまれ文かる
さしたまして そしゝあるゝとゝるどへのゝうり

[illegible]

給しをも世のためしともおしなげすめるもよ
うちまじらひ給ひしそれぞよもさうおもひやり
うきさけざきもそらでられじとそんどきされいうそく
とあはれあそびをそびしまへる海とよるあれば
源 大将の心をうちさうぞひ給ひざりつかなどのさまかゞ
宮はいとゞしきさ心もてなればいとゞあはれしさ気色
まそみぞさゝこゆれどむりしありされ人思ひ
おもしろさそて致仕の御心ばもまちさくりしで
ひとへにむすめをこれらの御ほどおもしすきまは
まそまりそでおとうとれ源氏まそていとさまきさゞ
元服のそひがしるさうわざさ文この君をも家づく

まだ心ざしや侍りしまおこがましうありし御

すりしとこれもくあやしとやおぼしけむ。

これ見てまいらせてれ心をも侍りしをそれ

ほいなきふさ御まへにてかくてもみなひとすまふ

めれどもおしさるいくらでもさうなるまでも人は

とらぬさ御まへにてをしもてえんさげりわさけ

たまりし人のこころにもありなむとしてこそ世侍つれど。

ものびおそげ心のいうろるまにすびさ給まふそへ

侍らぬ女院のれうとてもましてさとをあらんなる

ぢょうつけてもお月やけのれうなうしろやすき

うらすこゆるは花園の御世ころうとをかる

こそ。一からすとお花さかれはさなれたるとし

ともうし侍しが御あとそうちをさせ給なれ

のぞくつつ侍りともおぼしきゆまでさせとものを

までおぼえて侍るべしうちくのませいしの給

さんはをて侍しぞもぞかれつるるくさげうる

あらり侍らんたどきえてしるをしてまへどさらう

れうしてとをすずかくひと所はおもしきして

ひまもるるまうつむ所なうさていり給ささるる

んはさしょうのめうらぎこうてまでて花もお月

まこと心ざしや侍りしはおこがましうかりしありさま
あまりとされもくあやしとやおぼしけん。
これみことごとくそれ心をも侍ありしなどそれ
はいふかひなくてもかくひきまぎらはしすまふ
めれどもおしなべていふとも人は
とくめさまてるしきこえんさげりけ
そわりし人のころもありなどしてつせ侍れど。
ものびおてげ心のうちをはなすだ
侍しめ斎院のことも
ごとまつけ
しける

人をればこそまんあめりとずぐさう
のうまひけばうすずるはいとおしうおぼさき
そつらことぞとおぼされざされおぼし
とゆし侍れど内わたりをさせ給あまく
のぐつこ侍りともおぼしも何まじことそのき
まておもえて侍るべしうちくませいしの給
さらんは侍しぞそれつるさげから
あわり侍らんたぞさそしるおしまへどもとう
むろしなともおもぐひと所はおもして
ひまもるるつむ所あうさていつ抱きうつ
んはさしもろめつぎるまるてそおぼ

しやうする。はせいふどうめが後しくこ此付い
でまさるべきこともうまへいぞんまゐらさうら
おまりとおぼしめすべし

ちかくて 此ゆのよみお まん法第一し 明第三日此院 一向とかん君の すみうるべき くわり為 [illegible]

まうその納 みて御月夜ある先うら うちうくせい細け之の手と自制し又院とを連て小成別あるべからし 明此院みまうんの志礼まうし院を中おいても成別まうるにうさすむひとあのうち候ひさりててとおしこめし一向院のうハさうあふ 及ぶべき事也

紅 れ法のするる事 [illegible]

かくゆてありしとれとこれとにおもの〳〵申まいらせ候　御いてやよいさもこれうに候のよく
ともすゝめとかりまいらせ候
むかしいうきとか理無我師人〳〵候とえ候ひて返事候てさらなへし
よくきゝ候へとおもしろく候のおかしく候ほどの中にたとへしれさうね相こゝろへし

月のはハ　細工ハ菊の形とゝのへておなし藤のもとのべさくし　此のすとよめり　晴　はさ家の哥ハ中子の哥と
みゑて月のすゑとみせさうにおなし御せ流のうひと流のまゝに中子の〔へ〕それかへりとの〔へ〕るり
手をまくの名さらにこゝうとなりけるは前も人のんとり　御前も人のんくとりてこくて
書と語つゝまりは人の心のつゝくかうと云し　右云ひけり会の付句の此とおち申せさせらるれど一
時と供切の心あり菊菊子その手かうなり　時分わり眼とけん—
いてまつちて　御才子の作おもる所で聞く後のく中宮へさ角とえかなくさし　ゝ御るを一入とならさ
人なし

目とる[illegible]人ゝ除目のおこなはるゝにあたりて除目のよし明法道家の説に曰京官の
除目あへしころを云かくてそれの事をあらはすけしきの事の日はけふの日にあてられけるより
それや司々もおさふれんは我法運にいふ也へしみとしの事も京官もといふにいはれや
大てのぎまじ個に多まいりて加階をあつき年給あるへしとも申すあまり任所ある人とも給ふなれ
受領加階をもせさる人除目の中その御給りてそれへきとあそりしとかや
れさいりて細に宮の年爵とて院の御給も同事ゝ御院の内給は院給に云掾二人目二人
中宮の御給も同し給りてあまた年給とて云あまり院中宮のまつりて人ゝに諸国の掾目ホ
の官位を給ても爵禄とおもて院中宮まつりけれはそれを年給とも年爵ともいふ

此のみかりの浜なし　白妙の袖しぼりつゝ年ふれて中々なる哀て語し、さゝもうくつりけり
世のたとへと云り
戚夫人のこと人めの田地よ比事とりても海をみて　ととみけり方のかく戚夫人のことゝかれて
ともんあらはれたるこそ又まへしとく　史記曰　呂后本記太后遂ニ断戚夫人手足ヲ去眼ヲ煇耳ヲ飲瘖
薬ヲ使居ラ厠中ニ命テ曰ク人彘ト云々　師古注曰呂后怨ニ戚夫人其子趙王ニ因テ戚夫人ニ断手足ヲ
ーーー云々　有漢本紀　戚夫人ハ漢ノ高祖ノ妾趙王如意ノ母也　恵帝ハ太子にてありしをかへん
とせしかともつひにそのかなはずして高祖崩し給ひぬ恵帝位をつぎ給て母の呂太后の
いきどほりにて戚夫人の眼をぬきて人彘となしつゝ厠によしあらしをとかれしたまふよし史記ニ
明け暮をしく出犯と成てかくしる事に相違太后ハ呂太后奉葬ハ恵帝ニ依るゝ

細候の御心ざしにて、うせ給ふんとある羽をいてすゝきさうしてあらん所まてこへさゝ御身に難きさらし
前日御文ふくうきらんいかなると存候へほとゝ云し師けれ後大のれ候いき定てさいをうせ存候へし
その年ふるへてまつり候のりをはれい所存てまいらせてかやうのへき事ともにも申候へ
某御頼けせらに候御とれ申候もてかうまつり候ゝたよりわ
以御しまゝ　至候のことは候ましきよしにてあへしと申し師来世にても候の為つかさと存し候まゝにて
為の来世のきゝとかくもうらんとのまゝ
なれはよの同人ふらん為つかの方に候ての根とのかうてたてまつりとかう候のことへき事と申し　呉宜日
師御申しつかてまうしさうにてはけての道申し来世まて候とめしつらとおもふもさる候の御まへ
候の仏とあそしさて御とうらみ申ひとそく

佛法のおしへ 細字の紀貫の詞し用ゐ自ら須く佛法の御文とあること実に此宗流は浄土の所伸ある
かくれなきうへに於て佛法のおもむき一毫ゆるかせに行ふ宗旨へおもむきし誤とみし
いふ還云記の注にも[illegible]法師宗旨にては此宗流と御坊[illegible]して云ふ此世の御もおよ
とおもふの[illegible]にて御文[illegible]御文[illegible]して御[illegible]之文此宗流の此世をはなれて世の
とそ浄土のうしろに[illegible]これ[illegible]浄土宗旨のすゝめにて[illegible]とあり
さて佛法のおしへの詞ゐんとさへんとなりて[illegible]
されはやすらかにしみてん まことにて[illegible]師浄の此宗[illegible]
元此宗流のかれるはすゑらいんなるへんとし
[illegible] 細字之の文し師の[illegible]宗の[illegible]何事も宗旨[illegible]